

浄土

六月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿二日第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別扱承認雜誌第三五二号)
昭和三十八年五月二十五日 印刷 昭和三十八年六月一日發行

第二十九卷

第六号

法然上人が現代においてになったら「選択本願念仏集」をこのようにおとさになるであろう 念仏信仰の真髓を明らかにした全浄土宗徒必読の書

選 擇 集 私 解

大正大学教授 文博 竹中 信常 著

新書版
定価 一、二〇〇円
送料 一、二〇〇円
三〇〇円

目 次

宗祖と共に
やすらげき旅路
念仏にすけさぬ
特急「ごくらく」号
砂糖と塩
いつでもどこでも
ふり仰ぐ山の高さ
浄土への道
借金と念仏
サシミ念仏
一に一たす二
偏依法然
あとがき

発行人 法然上人鑽仰会
発行所 大 道 社

仏教保育テスト

め ぐ み

指導 大正大学教授 文博 竹中 信常
画 井上 与志夫/荻原 弘志/野沢 知且
B5版・48ページ 定価 100円・千40円

目 次

おやくそく
はなまつり
こいのぼり
おほ
おひが
じょうどうえ
ねはんえ
ひなまつり
みおしえ
保育テスト

みほとけの三つのおしえ「三法印」を
美しい絵と さわやかな歌とを通じて
えがきだした待望の仏教保育書

発行所 東京都千代田区
飯田町1の21

大 道 社

TEL <332>5944
振替 東京 8247

浄土

六 月 号



頂の雲をしのびてふじの山

念仏をこととせざる人は、肩を並べ、
膝を与むといへども、源空に疎かるべし。
三業皆異なるが故なり。

法然上人御法語

—◇目 次◇—

表紙

東鑑・天竜山 第三洞浮影

仏法を貫くもの.....	住 藤 良 智 (2)
随想 ハワイの思い出.....	宮 本 文 哲 (10)
空転の論理 (平家物語と仏教).....	峰 島 旭 雄 (6)
宗門教化振興会の動行.....	飯 田 信 弘 (12)
中国笑話 笑いの生活.....	安 居 香 山 (16)
紀行文 アメリカ旅行(完).....	佐 藤 治 子 (20)
怨には愛を.....	(12)
御法語をいただく.....	(33)
表紙の写真.....	(5)
三部経の再発見.....	須 藤 隆 仙 (28)

仏法を貫くもの 佐藤良智

(大正大学教授、文博)

初夏の風がさわやかにゆれ、香うが如き奈良に、高雅ないらかを誇る唐招提寺の開基、鑑真(がんじん)和上(わじょう)の、世にも尊く拝せられるみすがたのおん扇が開かれる。五月の六日は千二百年の御祥当であると言う。(西紀六八八―七六四)世は日本文化のれい明期である。近時、作家井上靖氏により、「天平の薨」成り、世評まことに高いものがある。

和上は、日本の入唐留学生の請によって、他の者が進んで渡日しようとする者が無いのを知り、「法のために何ぞ身命を惜しまんや」と申されて渡日を決意された。しかし、当時の航海法では日本に渡るとは大変困難で、前後六回、十二年間の長い間、初心をひるがえさず遂に来日の目的を達せられた。しかも、その間に眼疾をわずらわれ、失明してしまわれたのである。現在、和上のために創られた唐招提寺にのみすがたのこされている。佛聖により、「おん目のしずく

ぬぐわばや」とよまれたのはこの像である。このように深いお顔は日本の彫刻のなかでも珍らしいものであろう。それは和上の人格にそなわった力からにじみでるものであろう。一度や二度のつまずきにくっしないものはあるかも知れないが、五度も渡日をくわだてられたということはもう人わざではない。ただの意志の強さだけではない。もう信念の世界だ。人をとびこえている。法(真理)そのものになりきって居られることを示している。そのような人の肉眼はもういらなくなつたのだ。失明は得明であられた。ますます深く内なる方となられたのだ。恐ろしい位である。法のからだとなられた和上の眼ならぬ眼から、「目のしずく」がしきりにたれる。慧眼が衆生を見給うからであります。何のために日本に渡ってこられたのか。仏法を伝える、法を伝えるため身命を惜まずはるばると海を越えて来ましたの言うまでもないが、そのなかでも戒律を伝えることが最も重だつたことであ

った。日本の人達に倫理の開眼に來られたのである。戒律を伝えるほかに、沢山の經典を伝えられた。また、書道の大家王羲之の真蹟を持ってこられた。また、唐の彫刻や建築の様式を伝えられたという。また、和上は医薬のことにも達して居られ、当時、正倉院にあった藥草等を整理しこれを実際に用いられたという。未だ未発達であつた日本の文化に、社会に、功献されたことは今更言うまでもないほどである。

しかし、前にも申したように、和上の真面目は戒律にあつた。戒と律の區別をやかましく言う学者もあるが、仏教に於ける戒律は人間に於けるきびしい倫理的自覚のあらわれである。仏教に戒律がなかったならそのねうちは半減するのではない。仏教の戒律は單なる教団の規律を言つたものではない。もちろん、そういう一面もある。しかし、その大道は人倫を説くことである。人倫がなかったなら人間ではない。しかし、仏法に於ける人倫は單なる道德ではない。深く、宗教の門をこぐてきた人倫である。道德のあらわれすがたは同じようにみえるものであつても一度宗教の門をこぐり、そこからあらわれた倫理は深く、そして根強く、生命をかけて、握持されるものである。生命を通じ、生命をつきぬけているものである。

和上、日本渡來の御年は六十六才で人間としても最も円熟

された時である。東大寺仏殿の御前に戒壇と言つて、戒を受ける作法をする場所を設け、上皇、太后、天皇、皇后、皇太子、百官、四百四拾余人の前に坐された和上のすがたはどのようなものであつたであらう。律僧の和上は決してきらびやかな衣を身につけてはいない。その顔も眼はめししい、海上にさまようこと久しく黒く日やけていたことであらう。異様であつたにちがいない。しかし、身、おのずから法光を放つて、なみいる人の心をうったにちがいない。女人のすすりなきが、きこえるようである。このような莊嚴にしてげんしゅうな精神的な集會は日本歴史のなかにあつても珍重なものであつたろうと思う。大仏の御像は建立間もなくさんとして輝いていたことであらう。日本の精神史の黎明はここに始つたと言つても過言ではないであらう。授けられる戒は、ぼさつの大戒と言つて仏教倫理の窮極をなすものである。

私はすこしくさかのぼらなければならない。

仏法とは何かと問われる。

『もろもろの悪しきを作さず』

あらゆる善を修し

自らの心を清めることこれが諸仏のみ教えである。』

これはたしかに仏法を貫く大道であり、人倫の大道である。ここに源を発して年を重ね、高く開闢された仏教の倫理は、

専門のことばで、三聚（じゆ）淨戒という。一、摂律戒、二、摂善法戒、三、摂衆生成の三である。一は倫理の消極面であつて、惡をしないことである。第二は積極的の倫理で善をなすことである。惡いことをやめて、いいことをする。

極めて平々凡々のことである。これが人倫である。人類のあらんかぎりの倫理である。これが輕んぜられた時に社会、人類の墮落が初りやがては滅亡するであらう。現代の最もつきあたっている問題は実に古く、しかも新しいこの問題である。仏法はすでにこの問題をその最初に宣言しているのである。而して、歴史を貫いてこれを実践し、人類を開発し、進展せしめた。日本民族をして單なる、「けがれを忌む」在來の單純なる思想から、強力な廢惡、更には崇高な修善を教えたのは仏法である。更に第三の摂衆生成こそ最も重要視しなければならぬ。これは仏法の極地である。この戒の別名は饒益有情（にやうやくうじやう）戒とも言ひ、すべてのいきとしけるものを利益せしめるということである。人類にかぎってこれをみよう。人類の福祉。人間にとって最後の希望であり願望であるのはこれである。このために人は努め人ははげむ。廢惡、修善もこのためにあるのである。

人間を仕合せにしよう。それが饒益有情戒である。それが仏法の窮極の目的である。人間は人間を仕合せするためにあ

るのである。政治も、經濟も、教育も宗教も、人類の福祉のためのものである。饒益有情のためである。ここに人間のねうちをみとめるのである。この戒、即ち最高の仏教倫理を円頓戒（えんどんかい）とも言ふ。わが祖、法然上人はこの戒の伝統保持者である。淨土宗徒は同じくこの最高の倫理の実踐者である。あらねばならない。否。あらざるを得ない。

「人様のためにならぬにはいられない。」というのがお念仏のともがらのもつ倫理であります。法然上人は八十才の御入滅のま近く、逆授戒をされた。このありがたい三聚洋戒をすすめるためである。上人は黒染の衣にわらぞうりでお念仏をすすめて、仏教倫理を説かれた。

和上といひ、上人といひまことに仏法を貫く道のうえに坐し、歩み、

輝いた。いまも尚、この道は貫き

通じている。この道に入らばや。この道に生きん。

お盆の施本 仏教の生活

お盆のこと／児童マンガ／施餓鬼／
塔婆の功德／經典を尋ねて／仁王さ
まクラビヤ／俳句／良寛さま／信の
風光／などお盆を楽しく信仰の芽ば
えとなる施本をおすすしめします。
●五十部以上一部十二円千実費●見
本乞切手三十円申込み下さい●

町三組島湯京文都東
13組島湯京文都東
房書山中山
(831) 8 4 9 4
電話

表紙の写真

国宝・中宮寺如意輪観音

古都を訪れ、みほとけを拝観しようと思ひ立ちながらも、観光バスの団体や修学旅行の団に会うと、静かにみほとけを拝む気力も消え失せてしまう。いつものことながら、法隆寺の夢殿で人波にもまれながら、真合わせにある中宮寺の門をくぐると、今までの騒然とした気持ちも、掃き清められた庭の静かさに、ほっとしたなごやかさを感じるのも、な

にも私ひとりだけではあるまい。尼寺らしいやさしく温みのある雰囲気と静寂さとは悩める人の気持ちを大らかに包んでくれるかのような不思議な情感がただよっている。くぐり戸から本堂に導かれて、あの有名な如意輪観音のみ姿に接するのも何度目のことであろうか。半眼のまなざし、ややうつむきかげんに腰をかけて右足を左の膝の上に、しかも左手が静かにその上におかれ、右腕は優雅にまげて、指先が軽く頬にふれている、あの有名な思惟のみ姿である。

飛鳥時代から大化改新を経て壬申の乱に至る、あの凄然たる時代に、この思惟菩薩が作

られ、拝まれていたのは、時代に超然としていたからではなく、その暗澹たる時代に生き抜いた飛鳥人の手になるみほとけであり、政治の混乱と庶民の生活のきびしさが、このみほとけを憧れる大きな源泉であったことを忘れるわけには行かない。

このみほとけはあまりにも知られているので、饒舌を必要としないことはいうまでもないが、ただ一言付け加えるならば、みほとけのお顔にある、あの茫洋たるまなざしである。やさしい微笑もこのまなこの輝きによるものである。しかし、そのまなざしが、時には滂沱と涙を流さんばかりにも見え、時には親が愛しい子を叱るようなきびしいまなざしにも見えてくるのは、拝む私の心の弱さに応じてくるせいであるのか。拝むたびに、私はあのまなざしに引きつけられてしまう。彫りの浅いまなざしは、みほとけの黒ずんだ色と相いまって、ブロンズなのかと疑わせるが、立派な木造であることを知れば更に驚かされることである。

飛鳥から壬申の乱に至る政治の混乱は、聖徳太子の生涯の不安、その一子、山背大兄

王の殺害へとたどるだけで充分である。その太子の母君が崩ぜられた後に、この尼寺が建立されたことを思えば、なぜにこのみほとけが涙を流さんばかりに見えるか、おのずから分るような気がする。人生での辛さが、他人の境遇をおしはかる度量と、ともに悲しむ温い抱擁とが、一つにとけあった時、このみほとけのまなざしと全く重ってくるのではあるまいか。どんな苦境や悲劇のなかにあっても、なお大どかな心を失っていないみ姿。また、このうつし世の悲哀を思惟するまなざしが、そのまま、浄土のはるけさを憧れることをも語っている。

中宮寺にて

会津八一

みほとけの あごとひちとに あまでのらのあさのひかりの ともしきろかも

この半伽思惟像は如意輪観音ではなく太子思惟像と呼ぶのが正しいとも言われているが、いまそのことにはふれない。ただ、私は心悩めるたびに、このみほとけの前に対坐して、いつまでも拝んでいたいと考える。それ

(石上善庵)

空 転 の 論 理

— 平家物語と仏教 —

峰 島 旭 雄

(早大助教授
正大講師)



「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり」の書き出しで有名な平家物語の巻一に、「妓王」というくだりがあります。いま、ある大学の国文科の助教授をしている親友Y君は、最近、愛妻「おゆき」さんをモデルにした随筆が出たことから、だいぶ有名になっておりますが、大学予科のころ、その当時のかれのベター・ハーフともいふべき国文学に、非常な情熱を注いだものでした。そのかれが、おそらくわたくしをそのかして、国文関係のある雑誌になにか書かせようとしたことから、奇しくも、わたくしは中学以来、久しぶりで平家物語をよむ機会をもったのだったと記憶します。わたくしはそのとき、やむをえずよまされたようなものでしたが、たまたまこの「妓王」のくだりに興味をひかれまし

た。もっと端的にいえば、このくだりに出てくる次の文をよんで、オヤと思ったのです。少しながいけれども、引用しましょう。

母とち是を聞くにかなしくて、いかなるべしともおほえず。泣く泣くまた教訓しけるは、「いかに妓王御前、さ様の事あるべしとも知らずして、教訓して参らせる事の心うさよ。誠にわごぜのうらむるも理なり。但しわごぜ身を投げば、妹の妓女も共に身を投げんといふ。二人のむすめ共におくれなん後、年老い衰へたる母、命生きてもなににかはせんなれば、我も共に身を投げんと思ふなり。未だ死期も来たらぬ親に身を投げさせん事、五逆罪にあらんずらん。此の世ばかりの宿りなり。はちてもはちてもなにならず。ただ長き世の間こそうけれ。

今生でこそあらめ、後生でだに悪道へ赴かんずる事のかなしさよ」とさめざめとかき口説きければ、妓王、涙を押さへて、「一旦恥を見つる心うさにこそ、身を投げんとは申したれ。げにもさ様にさぶらはば、五逆罪疑ひなし。さらば自害は思ひ留まり待ひぬ。かくて都にあるならば、又うき目をも見んずらん。今はただ都の外へ出でん」とて、妓王廿一にて尼になり、蟬蛾の奥なる山里に、柴の庵を結び、念仏してこそ為たりけれ。

妓王物語はあまりにも有名ですが、一応、話の筋をたどっておきましょう。この話は平清盛が全盛をきわめたころの話であります。清盛は、京中に名だかい白拍子の上手、妓王をこよなく寵愛したもうたので、妓王は

世の人びとの羨望のまゝとなりました。ところが、そこへ、忽然と、仏御前という競争相手が現われたのです。はじめ仏御前を追いかえた清盛も、妓王の情ある介添えの言葉に動かされて、仏御前とあい、今様をきき、舞も見るようになります。仏御前は「髪姿よりはじめて、みめかたちうつくしく、声よく節も上手な」女で、心もおよばず舞いすませましたので、清盛の心はいつしか仏御前へ移ってしまします。いまは寵愛をうばわれた妓王は、清盛から三度去ることをせまられます。彼女は泣く泣く、「もえ出づるもかるるも同じ野辺の草いづれか秋にあはではつべき」という一首の歌を残して、宿所へもどっていきまます。年明けて、清盛は無情にも、仏御前のつれづれを慰めさせようとして、妓王を呼び出します。この情ない仕打ちに妓王はとつおいつ途巡しますが、これをことわればまたどんなひどい仕返しを受けないともかぎらない、ぜひいつてくれという母親の言葉に、ついに決心して清盛の御前に出て、舞をまいます。涙ながらに退出してきた妓王はこういいま

す。「親の命を背かじと、つらき道に赴いて、二度うき目をも見つる事の心うさよ。かくて此の世にあるならば、又うき目をも見んずらん。今はただ身を投げんと思ふなり。」これをきいて妹の妓女をまた、「姉身を投げば、我も共に身を投げん」と決意のほどをほめかします。すると、母親が、さきほどの「いかに妓王御前、さ様の事あるべしとも知らずして……」という言葉を述べるのであります。さて、この「妓王」のくだりをもう一度よくみかえしてみましよう。そして、母親のいうこと、また、それになにいう妓王の返事を、よく考えてみましよう。そこには、なにか論理の空転ともいうべきものがないでしょうか。わたしがオヤと思ったというのは、じつはこの点なのです。妓王の母親はこういいます——このような屈辱を受けて娘は身を投げて死ぬという。姉さんが死ぬならわたしも、妹娘も身を投げるといふ。それでは、年老いたこの母も生きていられぬ。ともに身を投げて死にましよう。しかし、考えてみると、こまったことになったものだ。そのようにすれば、娘は、まだ死期にいたらないこの母を死に追いやったことになり、仏教にいう

五逆罪の一つを犯すことになってしまふ。きくところによると、五逆罪を犯せば、後の世において、この世で味わうよりも苦しい悪道におちいらねばならないということだ。今生でこのように苦しめた娘に、このうえまた後生において苦しみをあたえることは、親の身として耐えられない。どうか身を投げることは思いとどまっておくれ。……すると、これをきいた妓王は、母親の言葉にうなずいて、「五逆罪疑いなし」として、投身自殺を思いとどまり、のこされた唯一の遁れ道として出家し、念仏三昧に日を送ることになるといふのであります。このように、生きるか死ぬか、自害のふちに追いやられた妓王の心を、その土壇場において転ぜしめたもの、それは仏教の五逆罪の考えであります。しかし、はたして、そのように文字通りに受けとつてよいものでしょうか。まず疑問におもわれるのは、その当時、仏教思想が遊び女である妓王やその周辺にどれほどまで滲透していたかということでありまます。少なくとも、死にのぞんで死を思いとどまらせるほどまでに滲透していたかということでありま

す。また、自分が死ぬことは母を死にいたらしめることである、母を死にいたらしめることは耐えがたい五逆罪を犯すことになる、ゆえに死を思いとどまる、という妓王の決断は、一見、よくととのった三段論法のようにみえますが、はたしてそうであろうかということがあります。じつはそうではなくて、平家物語の作者は、時代思想であつた仏教の考えを、物語進行の一つのあやとして用いたのにすぎず、その綾にあやつられて、妓王は作者の好みのままに、尼となり念仏を申すのではないだろうか。極言すれば、ここになにも仏教の五逆罪をもちださなくとも、妓王は尼となり念仏を申すことになるのではなからうか。要するに、作者は妓王を尼にし、妓王に念仏を申させればそれで満足なのではないか。これがその当時わたくしの頭にかんだ感想でした。そこで、わたくしは、Y君のすすめた雑誌にこう書いたものでした。いま人はたびごとに民主主義を口にする。民主主義だからこうする、民主主義だからこうしない、と。しかし、この「民主主義」は論理の綾として使われていないだろうか。論理であるよ

うにみえてじつは論理でない空転の論理が、そこにあるのではないだろうか。平家物語の「妓王」のくだりもその例外ではなさそうだ。……この管見は、戦後わが国に滔々とながれこんだ民主主義の浮薄な風潮にたいする反撥と、血気にはやる若い者の八方やぶれのかまえのような論調を差し引いたうえで、よんでもらわなければなりません。しかし、わたくしの根本的な考えはいまでもかわつていないと申しあげて、差し支えないのではないかと思います。一つの思想が、ある時代のその民族に、まるで空気のよう感じられなものであるということ、ある意味では歓迎すべきことであるかもしれません。またある意味では、非常な危険をはらんでいるともいえます。それは、その思想が形体化する前兆であり、その論理がいたずらに空転するきざしであるといえます。このことはもっとも警戒すべきことのように思われます。

このようなことがあつてから、しばらくして、わたくしはたまたま、小林秀雄氏の「無常という事」という評論集をよむ機会がありました。この本は「過去を上手に思い出すこ

と」を基調として、一言芳談抄や徒然草、西行や実朝を槍玉にあげて、痛快に論評しておりますが、その中に平家物語もふくまれております。「平家のあの昌頭の今様風の哀調が、多くの人々を誤らせた。平家の作者の思想なり人生観なりが、そこにあると信じこんだがためである。一応、それはそうに違いないけれども、なにも平家の思想はかくのものと仔細らしく取り上げてみるほど、平家の作者は優れた思想家ではないところが肝腎なので、かれはただ当時の知識人として月並みな口を利いていたにすぎない。」眼光炯々として辛辣人を刺すこの批評家は、平家物語をこのようにみるのです。そして、明確なりズムにのつた、知性の筋金いりのしっかりした語調で、こういきります。「当時の無常の思想のごときは、時代のはかない意匠にすぎぬ。」

わたくしは、この文章をよんで、じつをいうとホツといたしました。わたくしが勝手に論理の空転などと称したものが裏つけられたと感じたからであります。ところで、いさゝこのように目がひらけますと、こんどはやた

らに、おなじような論評なり解釈なりが次々と目に入つてまいります。「平家の作者も、この時代のもつともありふれた思想と考え方をもっているだけであつて、物語のどこをみても、特別にちがつた、あるいは他人よりも勝れた思想家であつたような証拠はなにもない。平家の作者は思想家として平々凡々であり、むしろ常識家であつたといつたほうがよいだろう」などという、けなした解説にもぶつかります。そして、ごく最近では、平家物語の「灌頂の巻」が、あたらしい意味で学界で問題にされていることも、しるしておかなければならないでしょう。平家物語にはいろいろの伝本がありますが、その中には、八坂本といわれる、「灌頂の巻」を認める系統と、覚一別本といわれる、「灌頂の巻」を認めない系統とがあります。ところが、「灌頂の巻」の中の大原御幸のくだりをよみますと、後白河法皇が天治二年の春、建礼門院を大原の閑居に訪れる文章には、「八軸の妙文・九帖の御疏」とありますので、そこには、釈迦・弥陀二尊の教説をおのおの別のものがあるとする二尊二教の主張がひそんでいるの

ではないかというのが、学界で提起された問題点であります。このような主張がかくされている以上は、平家物語の作者は浄土門の人、しかも、西山派の信仰をもつた者であるというのが、あたらしい説の要点であります。これまで、平家物語の作者がだれであるかについては、決定的なことはわからないとされていまして、この論争はまだ自分のあいだつづき、学界はただならぬ波紋をくりひろげることでありましょう。

これと関連することですが、やはり最近、仏教文学研究会という研究者の集まりが、あらたに大同団結して、注目すべき活動を展開しております。これまで純粹に国文学の領域にだけとじこもつて研究してきた視野をひろげて、仏教という視点からあらたに研究のくわを入れようとする試みであるようです。平家物語もこのあたらしい光にあてられて、こままだおつづいていたヴェールを次第にとりのけていくかもしれません。

話がよこ道にそれましたが、それでは、平家物語ではなく、仏教そのものに、空軀の論理があるかどうか。少なくともこのように

問うことはゆるされるでしょう。すぐにいえることは、仏教には空軀の論理はないけれども、空の論理ならある、ということでありましょう。しかし、空の論理も、その空が、虚無的に受けとられた悪取空であつたり、執らわれた但空であつたりすれば、空軀の論理となりかねません。わたくしは、これと関連して、もう一つ、「沈黙の論理」というものも考えたいと思います。西洋のことわざに、「雄弁は銀、沈黙は金」といわれているのは周知のとおりであります。仏陀にもしばしば偉大なる沈黙がありました。沈黙は、やはり、ある意味で空であります。わたくしは、空軀の論理と沈黙の論理を、仏教の空の論理を基底として考えてみたいと、かねがね思っております。いま、ここでは、平家物語の「妓王」のくだりを手引きとして、空軀の論理についていささか述べました。いずれまた機会を得て、とりわけ沈黙の論理について卑見を述べてみたいと思つております。

随想

ハワイの思い出

宮本文哲

(善導寺法主)

室生遼星の詩に、「古里は遠きにありて思ふもの、そして悲しく歌ふもの」と云ふのがある。私は恰も此の詩の主人公にでもなった様に、去る大正四年宗大を出ると開教使として直ぐ布哇に渡り、昭和三十六年まで常夏の国布哇で浄土宗開教の爲め微力を致した。此の四十七年間の長い間、私は古里恋し懷しやと盛に郷愁を馳せたものである。

一昨年帰国して泉都別府に閑居、専ら晴耕雨読を楽しんでいたところ、此度不思議な仏縁に恵まれて大本山善導寺に座する事になったが、外地の生活が余りに長がすぎたため、万事万端センスのずれがひどいのである。そして其のずれが次第に尾を曳いて布哇のヨサがしみ々々と偲ばれるのである。

私が殆ど半世紀の長い年月を布哇で暮した第一の原因は、アメリカは国がらとして宗教を尊ぶ国で、随って宗教

家として働き甲斐があるからである。想ふにこれは米国の建国は信教の自由を求めて英国より渡来した清教徒の手に依って開拓されたからである。現に米国の元首である大統領も其の就任式には必らず聖書に手をのせて神に宣誓しなければならぬ。又米國議會を始め、各州（五十州）の州議會も其の開会に当り宗教家が開会の祈禱をするのである。布哇では基督教、仏教、神道（日本の）等の各教役者が交替でこれを行っている。

又、結婚式も総て宗教家によって司式されている。それも日本の様に単に司式するだけでなく、布哇では司式者が政府発信の結婚許可証に署名して提出せねば法律的な結婚とならぬのである。これを逆に言えば、若し宗教家が司式を拒否すれば正式の結婚は成立しないので、そこに宗教家の強みがある。

宗教家を尊敬して居る実例として私に次の様な体験がある。

一九三八年四月、私は米國加州ロスアンゼルス^{ロサンゼルス}の浄土宗別院監督野崎靈海師の招きをうけて、当時ホノルル^{ホノルル}浄土宗別院開教総長窪川旭丈老師と共に船で渡米した。船がロス港に着くと事務長は乗客一同を甲板に集めて次の様に言った。

「これから税関吏の検べがあります。それで一列に列んで下さい。其の順序は、米国市民、白人、モンゴリア人、黒人の順であります。」と、それでもモンゴリア人種である私共日本人は列の後の方に列んだ。其時窪川老師は法衣を私は洋服の上に袈裟を掛けていた。やがて税関吏がやって来たが法衣姿の窪川老師を見ると、「カムカム」とさし招いてイの一番に検べてくれた。おかげで私は二番であった。居並ぶ白人連中も些か驚いた様子だったが、私は頗る愉快だった。言うまでもなく、これは宗教家を尊ぶ米国人の常識がそうさせると思う。

ついでにこれと正反対の話を今一つ、其後二週間程たった或日、私共一行五人は当時加州サンデゴ―仏教会（本派本願寺）の主任西居開教使の案内でメキシコに行った。米墨兩國の国境には各々厳めしい税関がある。先づ米国側は全員無事通過したが、墨国側で引っかかった。其れは五人の中窪川老師と、当時ロス曹洞宗別院布教總監サ雲老師の二人が法衣姿であったからだ。当時墨国は赤にカブレて極端に宗教排斥をやって居った最中だったので、一目で仏教僧侶と判る法衣姿がいけなかったのである。私共三人（野崎、西居、宮本）は洋服だったので入国を許可されたのであるが、老師二人を残してメキシコ入りも出来ず、残念な

がら引き返したのである。それにつけても初めは法衣の爲めに助かり、次には法衣の爲めに困難を招く、金く世の中は妙なものである。

ここで又附録の話が一つある。一度国境を越えて墨国内に入った私共の自動車は僅か十五、六分間で米国に引き返したのであるが其のまま、乗り打ちには許されない。又々米国税関吏の検べを受けた。其時車の中に在った一鉢のオモトに税関吏の目が光り「植木類は一切外国から持ちこむ事は出来ない」と没収された。西居師が、「それは昨夜館府説教に行った時、信者から貰ったのだ、もともと米国内のものだから返してくれ」と歎願したが、「国法だから……」と云って返してくれなかった。其時の西居師の残念そうな顔は今でも私の目ぶたに残っている。

私は布哇の仏教各宗の現状を語り、それを通してややともすれば敬遠されがちな日本の仏教に活を入れる参考にしたいと思つていたのだが、限られた紙数のため、残念ながら次の機会に譲る事にした。

支部結成のお願

- 一、会員五名以上で支部をご結成下さい。
- 二、支部には、支部拡張用として、お申込み次第、無料で見本「浄土」をお送りします。
- 三、支部には、毎月「浄土」を一冊贈呈します。

法然上人讃仰会

宗門教化振興会の動行

飯田 信弘

(四日市光運寺住職)

戦後思想の混乱とともに種々様々な新興宗教団体が結成され、年と共に益々盛んとなり、近來異状なまでの様相拡大を示している。かかる宗教団体は、吾々に色々な意味に於て何かを教えているように思われる。中でも人間の欲望的なものに根ざしてその教義と行動を進めている宗教団体を見ると、彼等の希求する方向が絶対的なものに対する帰依感情と、社会より受けた自己の尺度（自己中心の）とも云うべきものを持って、それを遂行して行く事が個人尊重の道であるかの如き思想錯誤を見る事が出来る。

戦後急速に普遍伝播したものの中にその時限りの瞬間的享樂に根をおいている流行的なものの現象を見る事が出来るが、解放運動的な動き解放運動的な思潮が、良い意味においても悪い意味においてもこの国の人々を支配しているように思える。政治的な面における解放運動、それは行動となつて表われ、組織の変革、構成の変貌となつてあらゆる社会機構の中で行なはれた。

次に思想面においては、ニヒリズム、自己敍外的思潮の底流より、救済の爲と云う行動が宗教界でも新宗教の興隆となつてあらわれ、理論よりも組織による宗教的共同体を媒介として個人の救いを目標として各種宗教団体が結成された。

怨には愛を

釈尊がコーサンビー城におられた時、一人のお弟子が些細な罪を犯した。この弟子に対して当然罰すべきであるという意見と、些細な罪は許してもよいという意見とがあつて、僧団内は二つに分れて対立することになつた。しかもお互に自説を固執して譲らないので、対立はますます激しくなつた。これを見た釈尊は、お弟子たちを集められて、長寿豆の物語をされた。

昔、ベナレスに梵王という王があつた。国は富み、兵は強く、数多くの国々を征服していった。同じ頃にコーサラに長寿という王があつた。この国は貧しく兵も弱かつたので、梵王の大軍をむかえて、忽ちにして敗れてしまった。長寿王は王妃とともに逃れ、遊行僧に姿をかえてベナレスの近くにかくれ住んでいた。その後長寿王夫婦は一人の王子をもうけ長生を名づけたが、梵王の目を恐れて、長生を一人別に暮らせた。

その内、かつて長寿の部下であつた理髪師に密告され、長寿王夫婦は捕えられ、刑場の

これらは一様に解放運動の一端と見る事が出来る。既成寺院より信者の離脱をある種の解放運動的な行動のあらわれとして見るならば、既成寺院に対する反動かあるいは絶望的なものに基因しての新興宗教への加入となり、亦是時代思潮の一つである現世利己的信仰への盲信、盲従が新宗教団体への帰依となつたと見られる。この様な傾向は近來益々盛んであり吾々寺院住職に問題となる点であらうかと思われる。特に地方における地縁的関連のもとに町や村、あるいは群落の中に居る住職は旧來の宗教儀式の中心にあり、法を説き、經典を誦誦し、民生の指導教育關係の要事を営んで人に接している。一人の寺院住職を中心し新らしさと古きものとが同居し得ずして苦悩している姿が現今の様体と云へる。

この様な立場にある寺院住職が如何にして教化の道を開いて行くか、如何にして法然上人の宗教を普遍させ、民衆の生活の中に反映させて行くかなどの問題につき忌憚無く語り合い、自己の研鑽、教化の資に供する為に本研究會を結成し、宗門教化振興研究会と名づけて生れたのが本會であります。

浄土宗合同の機運漸々濃くなった昭和三十七年早々二月四日會は作られました。再来一年間毎月定例の會を會所を異にして會合し、會員の中より出題者を出して問題とするテーマを提出してもらい、お互忌憚なく話し合う、自己の信念、あるいは経験、感想など語らう、時には讀書紹介、自己の奉職している福祉教育關係の内容等紹介して知られざる一面を知り、提出された問題について疑問とする点は疑問として残し、解決出来る問題については解答しあい各自研究して發表する。發表の場が會員會合の席上はもとより檀信徒に対して行い、各自相応の具体的方法による教化施策の実践である点が本會の特色とする処であるかと思ひます。

従つて学的に体系づけられた教に就て研究すると云うのではないので、宗教一般の概論的なものから亦斗病體驗から得た浄土教觀、寺院運営から見た浄土教、民衆の中に生きる生涯に対する態度、生活觀の分析、そこにおける念仏の信のあり方、今の時代に課せられた寺院の課題、往生の語義の紹介から何れを選

露と消えた。長寿王は刑場にひかれてゆく途中で、遠くに長生の姿を認めたが、素知らぬ顔をし、ただ一言「うらみはうらみによって鎮まらず、うらみなきによって鎮まる」といった。

長生王子は、森に入つて泣き暮らしていたが梵手を殺す計画をたてた。そしてその第一歩として名前を偽り宮廷に仕える象師の弟子になつて働いた。長生は笛が上手であつたが、彼の美しい歌声と笛の音が、いつか梵王の耳に入り、彼は近侍の一人に召し出された。彼はよいよい熱心に働いたので、ますます梵王王のお氣に占し、次第々々に重く用いられていった。

ある日、梵王王は狩猟に出た。その時の近侍の長は長生王子であつた。長生はわざと護衛の軍隊から遠ざかり、王と二人で車を曠野に走らせた。やがて王は疲れてきたので、長生に声をかけた。

「若者よ、車を止めよ。しばらく休息しようではないか」

そこで長生は車を停め、草原において休んだ。王はよほど疲れたとみえ、長生の膝を枕にして、まどろんだ。

んで檀信徒に示すか、現代人の生活に対する態度と念仏との関係、それをどう結びつけて浄土教的宗教生活観に近づけて来るか、いづれも具体的方法の作業的方途をも考慮しての討議を主題としている。

本会は民衆の動向を意識しての研究であるので近代人の動向、ものの考え方、生活を支配している思潮……このような現在把握を通じて法然上人の浄土教が如何に生命的な価値内容をもっているかの視点より思惟し教化すると云う態度をとっている。

法然上人に対する考へは上人の教すべてが選択の態度であり選択の信仰体制より来るものである事を見極め、上人自身の宗教哲理より生れ成長して来た教として受けとっている。現在の一点に過去も含まれそして未来も入っていると云う三世観より唯今の瞬間に光明に摂取せられ弥陀の光明におさめられていると云う往生思想、それは弥陀の願心によって莊嚴せられた浄土へと連なるものであり、宇宙的眞如よりの顯現として念仏信仰の世界が往生浄土の道であり、この道は如何なる民衆の動向があろうとも変へないで民衆の方を

この様な考へに近づけて来る事が必要であると云う処より西川知雄氏の「現代人の生活関心と念仏」と云う出題があり、この具体的方法として豊岡氏は有縁の拡大こそ要であり、現世において救はれていると云う実感を現世利益の方便の利用によって図る事を主張、更に有縁の拡大を為して行く中心点である僧自體の自覚、特権的、伝統的な寺院宗侶として在る限り教は普遍しない。「元祖時代の形式以前の信仰へ立戻って、真実に人間一人一人を救って行く念仏、即ち生活と直結した信仰に活眼を開かねばならない」とする藤田信雄氏の「寺院の新しい課題」の提唱があり、僧自身の自覚を目途したもので、岸寛勇氏の「住職覚の提唱」、「往生について」、宗乗史よりの引用による出題あり、亦柳宗悦氏著「南無阿弥陀仏」の読書紹介と、自己の信仰告白とを兼ねて井上隆真氏より提出されている。

時代の思潮についての討議では創価学会は宗教であるか否かとの質問もあり純粹眞実の宗教ではないと思うとの返答より、大正大学竹中博士より「宗教から政治へ」と題して特別寄稿があり、利益共同体としての宗教と見

長生は自分の膝を枕に寝込んだ王をみて、今こそ父母の仇を報いる時だと思った。長生の父母の國を奪ひ、殺した梵王王をうつのはこの時とばかり、劔を抜いて王の首にぎした。その時、フト長生の胸に浮んだのは、父が遺した言葉「うらみは、うらみによって鎮まらず、うらみなきによって鎮まる」であつた。長生が劔を手にしたまま躊躇してしていると、王は何かにおびえたようにはね起きた。「大王よ、何を恐れているのですか」と長生が質ねた。

「若者よ、余が眠っているとき、コーサラ國王の王子長生が、劔をもつて迫り、まさに余の首に劔を刺さんとしたので、驚いてはね起きたのである」

「大王よ、私こそ、そのエーサラ國王長寿の子、長生王子である。永年父母の仇を打ちべく努力してきたが、今こそ仇を報いる絶好の機会である。私は怨をはらすであらう。わが父母の悲しみこそ思い知ったか」

長生は王の首を押え、あらためて劔をかざした。すると王はすっかり驚き、あわてて、「愛する長生よ、今まで汝を愛してきたこと

ないで人間生存の根底にあるものとして宗教を見、この立場より藤井実成氏からは「念仏の信と道德教化の問題」と題して出題があり、青少年の非行問題と犯罪の激化の様相を説かれて、「人類救済の燈明たるべき仏教がその解決に如何なる努力をなしつつあるか」と提唱、個々救済の方途を念仏の信が根本となり日常の道德生活が行なわれて行く事を主張、これに附随して授戒に対するわかり易い解釈の実例をあげて説明している。

昭部明宣氏は現今の世情にもまれている寺院住職の実態より、「蓮門住持訓」信随上人等の説に助けられて報恩行としての自行化他の道を遂行している事を述べて「寺門の経営について」と題して出題あり、亦、中山静雄氏は「塾学校に奉職して」と題して塾者の教育の実際と個々に対してほんとうに教へる処に真に教育の成果あり、仏者も亦而りとする信念にて、「もの」も云へない子供達にものが云へるよう教育、仏心大慈悲の行を実践している事の紹介あり、亦、後藤満誓氏は「心の遍歴」と題して新興宗教各種団体の本部を訪ね、そこに於て自ら行に参加して各新宗教

の教を受け「すべては浄土教である」との言を提唱、会報に記載して会員に配布して大いに益する処あり、亦、山下英次氏は自己の病の体験より「応病与薬」と題して「宗教体験を通じて宗祖と一つになる」事の提唱などあって出題する題名は異なっているとは云へ、夫々の立場における信念と寺院生活体験とが十分あらわれている。

現今、地方寺院に居て時代思潮の流れ、社会様相の変化より受ける教化の事々は、教化者の立場に立たされている住職の一樣に同じ問題であり、同じ課題であるかと思われる。

此処で問題となるのは、それに対する適切な解答が容易に見つからない事であり、見つからないまま教化して行かなければならないと云う苦悩がある。この苦悩の実態をお互語り合い、現在の把握をし乍ら教化の道を研究し、法然上人の遺言に見られる各住各居夫々の草庵にて念仏を修する。真実方便の語りかけとしての法語の一つ一つを今の時代感覚に受けとれる様研究し、それを各人相応の方法をもって檀信徒に実際に適用しようという処に本会の動きがあるといえよう。

は、汝のよく知る通りである。余の願いを聞いてくれ。余の生命を助けてくれ」

王の一命を自分の手に握っているものの、長生は再び父の遺言を思い出した。せっぱつまった長生は、手から王を放し、劔を収めて「大王よ、私を赦したまえ」といった。かくて二人は互いに赦しあい、手を固く握って将来の親交を誓った。

やがて二人は王宮に帰り、王は大臣たちを集めて、こう賞ねた。

「もしここにコーサラの王子長生を発見したなら汝等はいかにするか」

すると大臣たちは口々に、王子を即刻殺すことを誓った。そこで王はいった。

「汝等よ、それは、ことごとく無用である。

今日、余は長生王子に生命を助けられ、余は彼の生命を助けた。そればかりでなく、うらみを長くいだくな。友情を破るに急であつてはならぬ。うらみは愛によって静まる。ということを教えてくれた」

王は長生の賢明を賞讃し、コーサラの國をもとのように返し、その上自分の姫と結婚させて、永久の平和を約束した。



中国 笑話 笑いの生活

安居香山

私達はもっと笑って暮したいものである。

何処に行っても、何を見ても、この頃は余り笑いがなさすぎる。早い話が、毎日の新聞を見て、何処に笑いがあるであろうか。

人の死んだ話。船が沈んだ話。世界の何処かで戦争している話。憎しみあい、ねたみあい、ののしり、騒ぎ、そして殺しあう。全く地獄ではないか。長いようで短い人生である。もう少し、楽しく、笑って暮そうではないか。

昔の人の話には随分ユーモアがあった。何処となくゆとりがあった。経済的な生活にゆとりがあったのかも知れないが、心に豊かさがあった。ゆつたりとした、大海を舟で行く様なゆとりと、その中から出てくる笑いがあった。

「昔はのんきなものであったよ」

よく老人の懐た談に、こんな言葉がでる。弥次喜多ではないが、昔は自然の風景を楽しみながら、東海道を上り下りした。今では夢の超特急とかができて、三時間半で東京大阪間を走ろうというのである。昼弁当をゆっくり食うひまさえない程である。

私は旅が好きである。特に通る駅々で、その土地の名物などを買い、土地独得の弁当を食う楽しみはたまらない。この頃の特急などでは、窓は開かないし、下手に降りると、いつドアが閉まるかも知れないとあって、安必してホームに降りることもできない。弁当など買うひまも無い。文化は有難いようであるが、又こんな悲しいこともある。

とに角、昔はのんびりと、笑いの中に生活

があったようである。笑い話は、こうした中から生れてきている。しかも、単にゲラゲラ笑うだけでなく、そこで生活の反省なり、人生の味わいなりをかみしめている。ほんやりと人生を送っている人からは、この笑い話は生れてこない。やはり、それなりに、苦勞をした人の体験から生じたユーモアなのである。

○

日本人は一体にコセコセとして、度量がないと言われている。島国で生きてきた宿命とも言えそうだ。これに比べると、中国人は、如何にものんびりとしている。山の見えない平原、向う岸の見えない川。そして、三年もかかって、川上からいかだで、豚や鶏を飼いながら下つくてる悠長さは、とても日本では味わえぬ世界である。こうした中に、中国の人は、生活を楽しみ、ユーモアのなかに、針でさす様な諷刺を、とうがらしの様にきかせて、生活を反省してきた。中国では、こうした笑話の集められたものが、随分たくさんある。前置きが随分長くなったが、幾つかの

笑話を紹介しながら、彼等の生活の知恵をさぐってみることにしよう。

ある所に一人の大金持ちがいた。貧乏人に、十萬金の富のあることを、いつもほこらしげに語っていた。ところがある日、ある貧乏人が、

「私にも、実は十萬金ありますよ。あなたの十萬金など、一向にめずらしくありませんね」

「なに、おまえが十萬金持っているって。何処に、そんな金があるんだい」

「どうです。あなたは確かに十萬金持っています。しかしですよ。いつも大事に金庫の中に入れて置くだけで、一向役に立たんじやないですか。私は確かに貧乏人です。一文もありません。しかしですよ、私が使いたいと思っても一文も無いのと、あなたが使えない金を金庫にしまつて置くのと、どれだけ違うんですか？」

大變、味わいのある話である。「あいつ

は、金があるくせに、けちんぼうだ」とよく悪口をいうが、けちんぼうだから金がたまるのである。金をためることは悪いことではない。しかし、使う時には使いたいものである。たとえ、わずかな金でも、本当に使える金、そして本当に生きて使える金、それが本當の富というものであらう。この金は、十萬金にも当る金なのである。

○

ある所に、貧乏人がいた。たまたまきた客があつたので

「まあ、お茶でも一杯」

と主人がとどめたのはよいが、茶の葉がな。慌てた主人が、裏に行つて、

「一寸、隣りで借りてくるから、湯を沸かしておきな」

と女房に言つて、出掛けたが、なかなか帰つてこない。随分、苦勞したのだらうが、結局、茶の葉を借りずに帰つてきた。女房さん、主人が帰らぬ中に、湯がどんどん沸くので、水を足し足ししている由に、大きな釜に、湯が一杯になった。やがて主人が

帰つてきたが茶の葉を持っていない。これを見た女房、

「ねえ。茶の葉がなけりや、茶もあげられないじやない。切角、湯がたくさん沸いたんだから、行水でもしてもらつたら、」

どうも貧乏人の話ばかりで申し訳けないが、兎角、笑い話には、こうした庶民の声が多い。庶民の生活の中にこそ、本當の人間の笑ひがあるのであらう。金や名譽や地位でいばっている人には、大變忙しいばかりで、笑つて馬鹿を言っているひまもないのである。ご苦勞様のことである。それにしても、この貧者の一燈は、お客には大變なご馳走であつたに違いない。

○

あるとき盗人が忍び込んできた。留守番の主人が、丁度、外に向つて居ねむりをしているようなので、そのすきにあたりを物色していた。ところが、フイとその主人がこちらを向いた。驚いた盗人があわてて逃げ出そうとすると、その主人は大声で呼び

とめた。

「おまえさん、切角きてくれても、私の家は貧乏人で何もなくて気の毒なことだ。

余り気の毒なので、おまえさんの顔も見られないんだよ」

また貧乏人の話であるが、のんびりした話である。そして、全く有難い人もいたものである。こんな世の中であつてみれば、下手な人殺しもできないというわけである。この頃のように、盗みに入っていながら、見とがめられたと言つて、罪も無い留守番さんを殺すなど、全くひどい話である。こんな昔は、大いに恋しいものである。せめて、人の世は、これ程に、おおらかであつてほしいものである。

○

或る寺に、一人の客が、夏の暑さを避けて急強にきていた。ある日のこと、小僧さんに、何かよい本はないかと聞いた。小僧さんは、さっそく、史記という歴史の本をどつさり持つてきた。

「これではだめだ」

ことわられた小僧さんは、こんどは漢書という歴史の本を、又どつさり持つてきた。

「これもだめだ」

又ことわられた小僧さん。こんどは文選という詩の本を、またどつさりもつてきた。

「いや、これでもだめだ」

余りのことに、小僧さんすっかり腹を立ててしまった。

「あなたは、何かよい本をというから、寺にある本の中で、よいのを持つてきてあげたんですよ。それだのになんです。中国では、これなどは、大変立派な本なんです。よ。何が気に入らないんです」

「いや、私はね、昼寝の枕にするに手頃な本はないかと頼んだんだよ。」

小僧さんも、おこるにおこれまい。「つん読」ということがあるが、これなどは買うばかりで、一向読まないことをいうのである。しかし、枕にするとは、又粹な話である。私なども、よく辞書を枕にして寝ころぶことがある。辞書の内容が、昼寝の中に、頭の中に

入つて行く様で楽しい。しかし、これなども、小僧さんには叱られそうである。

○

或る男が川に落ちた。

「おーい、助けてくれえー」

丁度、その時、橋の上を、一人の男が通りかかった。見ると下の方で、一人の男が、アップアップしながら、助けを求めている。

「今、助けてやるぞ。いくらよこすか？」

「二十文でどうだ」

「安いじゃないか、もっと値上げしろ」

「三十文でどうだ」

「だめだ。まだ安いぞ」

「けちんぼうめ。馬鹿にするな。もうこれ以上、値上げはせんぞ。厭ならはつといてくれ」

全く驚いた人々である。命と金とのやりとりである。しかし、どうもこれも他人事ではなさそうである。仏様も、随分金については教えを垂れておられるが、さてこんな時は、

どうしたものであらうか。

○

父親が子供に字を教えていた。

「いいかい。一の字はこう書くんだよ」

ある日、たまたま父親がテーブルを雑布でふいていた。子供がはたにしたので、こんどは雑布で、テーブルの上に大きく一の字を書いて、

「ほうや、これ何という字だい」

「知らないよ」

「だって昨日、あんなに父さんが教えてやっただけじゃないか。一という字だよ」

「へえ。これが、一の字なの。だって、昨日、紙に書いて教えてもらったときは、うんと小さい字だったよ。字って、一晩にこんなに大きくなるの」

一寸、毛色の変った笑い話であるが、父と子との間にも、ふき出すような笑いが、数々ある。大人が考えている世界と、子供が考えている世界とは、随分違ふものである。人を教えるときは相手を見なければならぬ。それにしても、家庭の中にも、こうした笑い

の生活が充ち溢れていて欲しいものである。

○

兄弟で、田仕事をしていた。収穫の分け前について、色々議論していたが、兄が、

「それじゃ、こうしよう。今年は、俺は上の方をもらうから、おまえは下の方をとりなさい」

「それじゃ、兄さんは米を全部とって、私は、薬だけという事になるじゃないですか。」

「じゃ、来年は、俺は下をとるから、おまえ、上をとりなさい」

こんなわけで、その年は、兄は米をと

り、弟は薬で我慢することにした。さて、年が明けて、又田植えの頃になったので

「さあ、兄さん、稲を植えようじゃないか」

と弟が、推提すると、

「うん。だけど今年は、あの田には芋を植えることにしよう」

奇知にとんだ笑い話である。生活から生れ

てきた笑い話である。それにしても、この兄は、随分ずるいことである。正に知能犯というべきである。笑いの生活も、やはり、どこまでも生活を豊かにする笑いであって欲しい。どの話にも、人間の反省が諷刺の中に為されている。下手なお説教よりも、この方が面白くて味がある。そして、笑いの中に、多くの教が説かれていく。生活の中からじみ出てきた反省の数々である。

中国の人々は、こうした笑いの中で、自分のあるべき道を求めている。特にそれは、庶民の中に多い。貧しくとも、笑いの生活に充ちておれば、人生は楽しい。日本の落語なども、そうした中から生れてきた。そして、中国の笑話に多くの影響を受けている。こんな話は、いくらかもある。又機会があれば紹介することにする。

山ざるのかほより赤き衣着きて

人にみえむも はづかしきかな

これは行誡上が、増上寺法主となられた時の歌である。笑ひの中にある反省と諷刺。やはり、立派な人には、それなりの生活の知恵があったわけである。

アメリカ旅行

《完》

ウィリアムスパークの首手かせ（昔の
刑罰を受ける道具）



佐藤 治子

囚人

十月二十五日ノースカロライナ州を通りヴァージニア州のハムプトンに居る友人の御宅へ一泊させて頂く事になっている。東部の北では紅葉を眺め山上では雪をみ、だんだん南下するにしたがって再び麻の着物でも着たくなる位暑かった。フロリダ州ではスパンニッシュモスに詩情をそそられ、一周してモスもちらほらとしか見られなくなるとそろそろ北上するにしたがって少しずつ木々が紅葉しかけている。ヴァージニア州へ入る前、河にかこまれた小さい町を通り過ぎようとした時、橋のたもとにライフル銃をもちパトロールが二人立っている。大して気にもならずその小さい町へ入った。又警官がいる。何かた大事でない様な空気がただよっている。小さい川のほとりに又パトロールがいて往来する車を調べている。私達も一応ストップされマリオンのライセンスをみて「OK」とすぐ通行を許可された。ひっそりとしている小さい町を過ぎると両側とも沼地に沿い並木と草が一杯生いしげっている。両側にパトロールカ

ーが二三台おいてあって誰も人がいない。きつと何かあったのだ。テレビでよく見る犯人追跡の為、パトロールカーが車を道路の真中において、シャ断する処でもみられるかなと変な期待をもつ。暫くしてからマリオンは「囚人が逃げたにちがいない。治子が気味わるがるといけないと思ってだまっていたけれど」と云う。飛んでもない、気味がわるい所かもっと深刻なシーンでも見られるかななんてと方もない事を、いささか好奇心も手伝っていた事である。パトロールカーも何台もいたし、警官も大勢出ている昼間の事故、恐ろしいなど一寸も考えてもみなかった。ライフルをもった警官の本物をみて、逆に興味しんしんとしているなんて、熱い国のフロリダで「熱帯けけ」にでもなっていたのかも知れない。田舎道の淋しい処を走って行くと、同じユニホームを着た青年達が、道ばたで工事をしていて。少し離れた所に又ライフルをもっている。少し守えいがいる。「あれなに？」見はっている。と云う。ニューヨークを立てっからマリオンが、「南の方で治子は色々変わったと

ころをみるかも知れないからおどろかないでね」と云っていたことは、こう云う風景も含まれていたのにちがいない。きつと刑務所が近くにあるのだろう。夕方近くなるとトラップにのせられ護衛されて帰る一団の囚人達のそばを走りぬける。すれ合う車も少い。「こんな所を一人でドライブしていると危険ね」と云うと、「一人の時は、早目にホテルへ着く様にする」と云う。右手をあげ、走る車にのせてもらうヒッチハイカーをよくみたけれど、一人のドライブにもしも変装した囚人でものせてしまったらと思うとぞっとする。学生らしいヒッチハイカーはのせて上げたらとふっとかわいそうになる。私達の車はバックシートには荷物をのせてあるから余ゆうがない。けれど誰でものせるのはあぶないところ。淋しい田舎を走り乍らふっと考えたことである。

ウイリアムスバーク

一夜をサターフィールド家でくつろぎ翌朝ハムプトンの砦を見学した。大きな砦で今は軍の要地になっている。南北戦争の時南軍の大

統領がとらわれの身となって一室へかんきんされて居られたと云う部屋の前を通る時、車は徐行しサターフィールドさんが説明してくる。そして名残りを惜しむ夫人と別れ車は一路北上する。広い道の両側の木々がだんだんと色づき美しい。大きな森のような広い広い



ワシントンの住宅。記念建造物として保存されている。

立派な大きなセンターで丁度私達が入って暫く

公園のような所へ車は入って行った。歴史上有名なウイリアムスバークである。

昨秋日本から訪問された閣僚と夫人達が泊られた場所で、私には新聞で読んだ時

「あ、あの町だとなつかしいと思えた。イ

くすると映画が上映されると云う。この歴史的建物はロックフェラー財団により復元されて十八世紀の建物そのままの姿で一つ小さい町として見学の対照になっている。上映された映画も独立戦争発端のもので英国のきづなを断ち切って雄々しく戦争に向う貴族の子弟と家族との愛情等、或いは戦争へ火ぶたを切る前夜の興奮状態など三十五分にわたってみせてくれるのである。ウイリアムスバークの古都を見学するに先だってこの映画をみた事は有意義であった。その後先ず植民地時代の議事堂へ足をふみ入れる。屋上には高く英国の旗がひるがえっている。守衛も当時の衣装を着ていて面白い。並木に沿って古い家々が並んでいる。今は中で商売をしていて見物人がおみやげを買い求めるようになってい

る。ガラス器やお皿等素晴らしい品を売っているけれど私には問題にならぬ位高価である。フラリフラリとのぞくだけにした。見学者が一団となり案内者につれられ方々の建物に入っていく。バスで案内される旅行団も居り見物の仕方などは日本と同じである。大樹の近くにある異様な道具が目に入った。ギロ

チンの様なものである。マリオンが私の知らない単語を云ってくれたものの見学中の事で処刑台なのだと思っていた。偶然にこの事をかいている時、私は一大の米海軍将校の訪問を受けた。本当に偶然にもフロリダの話からスバニツシユモス、そして「ウイリアムスバグへ行きましたか」ときかれたのでその写真をみせ「これは英語で何と云いますか」とたしかめた。ピロリー「首手かせ」と云って昔罪人の首と手を板にあけられている大きい円型の穴に首をつっこみ小さい穴に手首を入れ人前にさらされるのである。罪状により時間に長短がありそれぞれが人前で物笑いの種になる、いわばはすかしい思いをし



ワシントン邸内の奥にある高地を参拝。

なくてはならないわけである。一定の時間がたつと許されるのであるが立ったまま手首の自由をうばわれるから辛いものにちがいないとその人は話してくれた。その人はマリンの将校だったのでマリンのヘッドコーナーの所の記念碑が何の形をしていたか、私の記憶が車窓よりみた事だし、いおう島の激戦の時戦死した将兵の霊をなぐさめるためのものであった事なので私はその時ふれたくない気持ちであつたが、日も立った今日その像の私の記憶をたしかめたかった。数人の兵士が旗のようなものを力一杯守っている悲愴なものであつた私のかすかな記憶はまちがいでないと話してくれた。その将校はチャールストンのカレツヂを卒業し私のアルバムを次々とみて偶然にとつて来た古い建物を身体をのり出して「なつかしい、これは何々の建物。ここをよく知っている」などと机の上にこの原稿をかいている最中に話は次々とはずんで「ああここへも行ったのですか。ああこの辺は沼地が多いんです」などと話はずきない。「スバニツシユモスを両親にたのんで送って上げましょう」と余ほどモスがやはり好きらしい。「こ

のモスは木を枯らししていくそうですね。家の庭木が枯れると困るから」と云って大笑いした。「アメリカの沙漠はどう思いましたか」ときかれ、私は「砂地と思つてばかりいたらカクタスがよきによきたつてアフリカの沙漠を想像していたのとはちがつていましたよ」などと次々と出る話がいずれも私の行った所ばかり。タムバ（タミアミトレイルの所で一寸かいた所）に住んでいる御両親の所へ大陸南部を横断して時々訪ねられると云う。何日車でかかりますかときくと五日間でと答えられる。「時速何マイルで」ときくと七十マイルか少し早くと云つて大笑い。歴史に明るい人でフランス人が昔住んでいたとか、その後英領になったとか、スペインがここまで占領していたのであつたとか地図を広げてマリオンが印してくれた旅行の順にしたがつて話に花が咲いたのである。偶然に訪ねてくれたその方のおかげでウイリアムスバグの記憶を新しくされたわけである。さて、この森の中にあるカレツヂは実にきれいな大学であつた。大きな森の樹のかげをうつす芝生に学生達が三々五々とみられ、こんな美しい大学で

勉強出来たら何と素晴らしい事だろうと校内へ入ってみたくなった。

森の中に復元されたこのウイリアムスバードグを出て私達はいよいよ首都へと車を向けた。

ワシントン 一

再びハイウェイへ出てワシントンへ向う。紅葉を愛で乍ら走る道は気持がよい。森の中の国道を走り少し坂を下ったと思われた頃右手に前にかい



たマリンのヘッドコーターの記念碑をみて一寸暗い気持ちになった。その奥の方に軍要地があるらしく、森の中の事として道路からは見えなかった。それより約百マ

ワシントンモニュメント。この塔は上までエレベーターでのぼれる。

イルでワシントンの郊外へ着いた。

豪華なホテルへ三泊する事になった。南へ行く時は素通りした雨のワシントンであったが再びワシントンへ戻った時は夕日が実に美しく落着いた首都の建物に灯がともす頃であった。翌日からワシントンの見学が始まる。先ずワシントンメモリアルパークウェイを通りワシントンの住まっておられた御宅へと向う。この径のすばらしく美しい事。マウンターバノンと云うききなれた所にある。勿論史跡保存になっているけれどこの土地の婦人會が管理しているとききおどろいてしまった。

ボトマック河畔を芝生の遙か下にみ下ろし広々としたお庭を歩いてみる。建物の中も各部屋に当時使用された道具がそのまま置かれてある。少し離れて台所。馬小屋。ワシントンが乗られたと云う馬車など順々に見学する。森の奥にワシントンのお墓があり国旗が立っていて守衛がいる。

見学が済み再び美しいパークウェイを通りボトマック河畔の桜並木をみ乍ら大理石の丸い大きいジェハアソンメモリアルへ行つた。ワシントンモニュメントと云う塔がそびえて



リンカーン大統領像。

ワシントン 二

リンカーン大統領の像

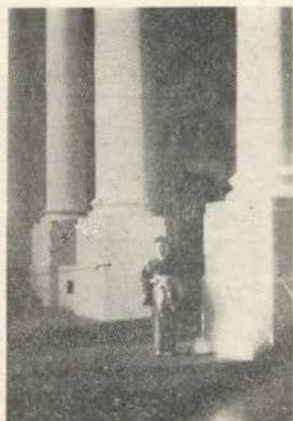
いる。中はエレベーターで登れる。上から四方を見下ろすとホワイトハウスが見える。陸海軍のヘッドコーターが見える。無名戦士のお墓の森も遙か向うに……などとぐるぐるとみて廻る。

忘れられないものの一つであるあのリンカーンのやせた顔にほほえみをうつすりと浮べ椅子にこしをかけておられるあのお姿がワシントンモニュメントの塔と長方形の池をはさみ建てられている大理石の四角いお堂にどっしりとおかれてある。この原稿をかき乍ら何度もそこで車を止め、広い階段からリンカー

ンのお姿を遠くにみ、池にうつる高い塔をながめたあの忘れられぬ三日間に心はひきしまる感じである。何とも云えないあの印象的なリンカーン大統領のお姿。一直線をかもし、建てられた塔と池とこのお堂そして後方に無名戦士の眠る墓地の森。特にディナーに御招きを頂いた後二人でモデルへ戻る途中夜のリンカーンの御堂の前で車を降りた。夜でも電灯が御堂の内部につけられて近々と行つてみる事が出来た。冷い大理石の大きい御堂の中にポーッと灯に照し出された御像の神秘的な美しさ、深い人間味をたたえているあの目もと、口もと、身体がしーんとして来た事は忘れられない。前の池にワシントンモニュメントの塔がうつって居り、後方の無名戦士の御墓の森は暗く只建物だけ暗い中に灯りで白く浮出ている。無言で冷い風の中を暫く佇つていたのである。

無名戦士の墓

無名戦士の御墓へ行く途中昼間なのにヘッドライトをつけた自動車の行列をみた。マリオンはお葬式で、無名戦士の墓に行くらしい



ホワイトハウス。特別見学を許され、正面玄関へ出てきたところ。

と話してくれた。私は目礼をして通った。墓地で車を降り広い石段を登る。大きな石の置物があり、一人の兵士が銃をもち一定の場所を同じ歩調で行ったり来たりして護衛している。十人程の参拝者がじっとみている。眉毛一つ動かさず同じ歩調で行ったり来たりしている兵隊さんは二時間おきに昼夜を分たず一年間を通してこうして護衛しているのである。成績優秀、品行方正の兵隊さんが選ばれてこれに当たるとか云う。非常に厳しくである。私達は後にある白い建物へ入った、入ってみると戦利品のような記念の旗とか武器がケースに入りかざられている。私はどこが無

名戦士の墓か参拝すべき対照物が見当たらないのでマリオンにきいてびっくりした。その長方形の石が無名戦士の墓なのであった。マリオンは私がそれと気付かなかった事が意外だったらしい。私は外へ出て改めて、ハンドバッグに入れておいたおじゅずをそっと手のひらにのせ、にぎりしめ心の中でお念仏をとなへ目礼したのである。日本から公式訪問された皇太子御夫妻、或いは有名人が花環をささげ参拝されるのはここであつたかと一寺院の主婦の私に遙々ここまで来て参拝するチャンスを与えられようとは感慨無量の想いで待ちつくしていた。皆だまって兵隊さんをみたり写真をとっている。そのまわりは公園墓地の様に小型の墓石が何万と円形にきちんとたっている。同じ大ききで無名戦士の石碑を中心に円形に展げられている。遙かにリンカーン大統領の御堂、そして塔、数多い官庁の建物が見下ろせる。マリオンは「写真をとる？」とたずねてくれた。「何万の靈魂の眠っている聖地、なんでここから写真がとれまじょう」と答えた。マリオンもうなずきそこを去ったのであった。丁度バスがつき黒人がも



国会議事堂

服で（と云って
も色のはでな服
の人もいたが）
大勢降りて来
た。これからそ
の墓地へ埋葬す
る儀式が行われ
るのだ。先程の
葬儀の車の行列
はやはりここへ
来る所であった
のだ。肅々と進
んで来るので未だ到着してはいないらしい。白人と云わず黒人と云わずすべてアメリカの軍隊に籍をおくものは希望により死後はここへ埋められるのである。森の中の墓地に白人の若い士官達が新らしく埋葬される場所に準備しているのをみながらこの森を出たのである。

ホワイトハウス見学

翌日朝早くホテルを出た。と云うのはマリ
オンの友人の骨折りでホワイトハウスを特別
見学する少数のグループへ入れて頂けた為、

八時までに到着する様にと云われた為であつた。各地から見学する人々は行列をして一定の人数に区切られる為行列して待っていて入れない事があると云う。私達は守衛に名前を告げると「どうぞ」と招じ入れられた。三々五々とする人々はいるがあたりは静かで一般見学者はその日は入れないのであつた。十二三人ずつ二三組に分けられ廊下を案内される。各大統領が使用された食器が一杯並べられてある小部屋。お客



ペンシルヴァニア州にあるデューポン氏のロングウッドガーデン。菊畑に立つマリオン

様が先ず招じ入れられる部屋。夜会でダンスをする大きなホール。会議室。食堂等々を静かに案内される。ケネディ大統領夫人が特に

趣味と教養の深さから御自分で壁の色を替える様指図された食堂とか、何の時代に何々の国から贈られた品々と銘うったものを方々にかざりつけられたと案内者は説明を加えた。私達は一階、二階と各部屋を案内されたがその部屋に大統領御夫妻は住まわって居られその日もお部屋にいられたはずである。一国の元首の、現在住まわって居られる官邸を見学するとは云え、中にはオーバーをきたまま歩いて行く人も居る。マリオンを桂離宮へ案内した時、スポーティな服装で見学していたアメリカの親子をみて、「いやしくも離宮を拝観しているのに何と失礼な事だろう。恥かしい」となげいていたのをおぼえていた私である。私も大いに敬意を払い服装もとのへ、見学中はコートを手にもって歩いた事は勿論である。正面玄関より外へ出る時、黒人の守衛が白手袋をしてうやうやしく静に大きなドアを開けて送り出してくれた印象は実によかった。博物館で声をかけて下さった東大の教授が「今日はホワイトハウスは特別見学日だそこで見学出来ませんで残念でした」と云われた時私はマリオンの努力を再び感謝せずには

居れなかつた。

ロングウッド
ドガーデン

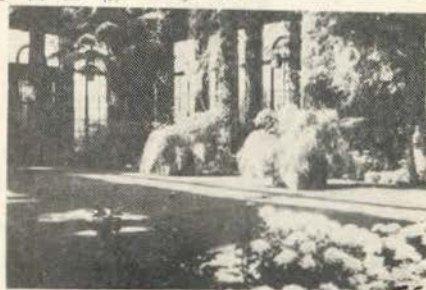
アナポリス

の海軍士官学校の校庭を一巡し折から構内の教会へ二列に並んで白

手袋をはめさ

つさつと進ん

温室の内部の一部。温室のロビーとでもいふべき広さに目をみはつた



で行く士官候補生の姿を、樹々を通し車を止めて眺めていた。そしてワシントンを出てからメリランド、ダルウエア、そしてペンシルヴァニアの三州を通り再びニュージャージー州からニューヨークへと戻る途中、有名なデューボンと云う人が作つたロングウッドガーデンへ寄つた。菊が晩秋の日射しを受けまっさかりでその色は各種共実にあざやかである。大きな温室へ入るとその大きさに先ずおどろき、うっそうと生い茂る樹々の下には鉢植えの菊

が数え切れぬ位並べられている。静かに音楽が流れている。日本の菊と全く同じで一体どちらが本家であろうか。誰がこの世話をし、どうしてこんなに立派な花を咲かせているのだろう。きいてみたいとあたりを見廻したが円丁らしい人は一人も見えぬ。小径を順に歩いて行く。熱帯の植物室に入るとらんが実に沢山美事に咲いている。ハイビスカスの大輪が咲きほこっている。どこにも円丁はいない。広い庭内には噴水あり、野外音楽堂あり、とても短時間では一巡出来そうもない。日曜日とて、ここまでドライブして来て花々を観賞している人があちこちを散歩している。とうとう何にも参考に聞く事が出来なかつた。よくここまで手入れが届いている事よと感心してしまふばかりであった。至る所で見学した庭園がどれもよく手入れが届き、見に来ている人達も又いたずらしたり、花をつまんだりする事もなく、花をいづくしみ鳥を愛する事におどろきの目をみはるばかりである。あたりまえの事があたりまえでなく感じられるのは全体的にみて公衆道徳の点では日本が未だ劣っているせいかも知れぬ。アメ

リカは物質文明が進んでいったのと逆に自然を大事にする様になつたのかも知れぬ、一方自然を自然のままにみる事を大切にすること生活し乍ら自然をこわして行くのが日本のお役人の統一のとれていない設計のやり方なのかも知れぬ。「日本は教育程度は高いが教養がともなつて高くなつていないんですね」と私の感じた事に同感された或る青年建築家が云われた事がある。デユニヴァのお家の庭先に水盤がおいてある。森にいる小鳥が時々水をのみに来る為である。アリゾナの友人に「治子、一寸来てごらんさい」と云われ窓の中から庭をみるとやはり水盤のへりに小鳥がとまり水をのんでいる。日本にだって沢山の愛鳥家や草花を育てつくしんでいる人達は沢山いる。私の云いたい事は一般をくらべてみての事である。勿論アメリカにも沢山アメリカの人達が恥かしいとか困ると云う問題はあちがいない。私は表街道を或時は裏街道を通つてもみたが、私の目にうつった限りに於ては公徳心は日本の方が残念乍ら劣っていると思つた。

ドライブ旅行中農村を通つても、景色を觀

賞する為の山地での駐車場でも道路わきなどが御不浄化する所は一回もみなかった。伊豆のスカイラインドライブへ行つた時自家用車でドライブしている人達の何人かがもうすでに御不浄化してしまつていて連れの外人達が目をそらしてしまい、運転手が「奥さん、恥かしいですね」と私にささやいた事がある。又あちらでも嘆かざるを得ない事は多々あるらしい。「この点は日本の方がよいな」と秘かに思った事もないではない。たとえば停年退職した人達が淋しそうに日向ぼこをしてゐる姿を幾度もみた事なのである。勿論社会福祉制度が行き届き老後の保証が得られるから事ではあるが、精神的に果して幸せの老後であろうか。車輪が止まる事のない様な大都市に住み、或いは働き、その速度におくれまいと、精神肉体系に疲れ切る人達にとり、自然を受する気持は又特別なかも知れない。

リスが遊んでいるあのマリオンのアパートの庭の見へる部屋に三週間余りをねどきし、その生活にとけこませてもらい、三週間で東部の北から南へと十五州を旅行し、その間に見た、きいたり、そして感じたりした数え

切れぬ色々の事を思ひ出すままにつずり、かくして私の東部での旅行は終わったのである。紅葉で美しかったブロンクスビルも二週間の旅をおえ、再びアパートへ戻ると広い庭内の木々はもう落葉する頃であつた。旅行の疲れをとる間も友人達にあたかくもてなされ、いたわられ感謝の言葉も云いつくせない。十一月五日、名残りつきぬ別れを惜しみ、夕焼に美しく染まらんとするニューヨークの空港を感謝と万感胸にせる思いで、古い友人が待つていてくれるアリゾナ州のチュサンへと飛び立つたのである。

後記

一ケ年に亘る私の旅行記を思い出すままにかきました。チュウサンに一週間を過す間にグランドキャニオンの雄大な景色にみとれ、或時はアメリカインディアン達の為に一生を働きぬいた一老婦人や、看護婦さんで余生を今チュウサンで過している二人の婦人に会いました。又農場を経営している在米四十年の日本婦人と会い私はまるで旧友にでも会うかの

如くだきつかれたり思ひ出はつきません。沙漠をデヴィス夫妻の車で通りサンフランシスコまで送つて頂きました。ロスアンジェルスでは浄土宗別院を参拝し野崎先生に御会いしました。西部の事もかきたかつたのですがあまりあれもこれもと細くかきましたので東部の旅行記と云う事になってしまいました。家庭の生活状態をききたいとおっしゃつて下さつた方もありました。が予定のページの都合上御希望にそえませんでした。おはげましや、御批評等をおよせ下さつた方々に誌上より御礼を申し上げます。本当にもつたない旅行記をさせて頂きました。感謝をこめてこの旅行記を終らせて頂きます。

新 規 会 員

- ◇東京・吉岡義三郎・久保田隆重郎・高木守正
- ◇大阪・片山法道・専念寺支部
- ◇法福寺・光明寺
- ◇兵庫・四方寺・願行寺
- ◇神奈川・九品寺
- ◇長野・観音寺
- ◇京都・吉水学園
- ◇秋田・白幡忠美
- ◇滋賀・法蔵寺・蓮見豊栄
- ◇和歌山・法壽寺
- ◇栃木・宝龍寺
- ◇広島・万念寺
- ◇青森・今井久治・須郷てる・今井リツ（敬称略）



三部經の再発見 (五)

須藤 隆仙

三身即一の如來さま

三部經が示す阿彌陀如來さま御真体の御完全さの中に、三身即一のお示しがあります。大經には『法身』が明かされ、觀經には『報身』が明かされ、小經には『応身』が明かされております。

大經に本願成就の法藏菩薩が説かれているのは、その本願成就されたというさらに奥にあるもの、つまり過去久遠無量不可議無央數劫の御本体が問題とされていることであって、それは『法身の如來さま』で、ここから『報身』も『応身』も生れるのであります。ために元祖上人は『法身とは、これ無相甚深の理なり。一切の諸法畢竟空寂なるを即ち法身と名づく』といい、『かの無相の妙理を解り知る智慧を報身とは名づくるなり……』応身とは、衆生を濟度せんがために、無際

限の中において際限を示し、無功用の中において功用を現じたまえるなり』【逆修說法】と仰せられているのであります（無際限・無功用ともに法身の世界をいう）。元祖上人の教えを頂いた親鸞聖人が『一如法界より、形をあらわして法藏比丘となりのりたもう』【一念多念証文。その他】といっているのも、そのためであります。

したがって『報身』は、法身という宇宙一切の仏のみ力が、私を救う力となって顕現したもので、その救済力の深さが、觀經に示されるところであり、それは大慈悲のお相（すがた）でもありますから觀經には『仏心とは大慈悲これなり』とあり、この經には三身中とくに報身を明かされているわけであります。

小經には阿彌陀如來さまの來迎や、諸仏の護念が説かれ、それらは、みな、念仏の行者に、如來さまが直接示現して下

さる『応身』の相を説いたものであります。

かくのごとくして、阿弥陀如来さまには、三身がそなわり、元祖上人も『四智三身ナカ四無畏等の』功德摂在す【選撰集三】と仰せられ、三身即一の如来さまであることが尊ばれ、それは、三部経によって一層明かされるわけであります。

本地身としての如来さま

勅修御伝に、遠江の国（静岡県）の作仏房という山伏が、熊野証証権現の靈告で元祖上人の弟子となったことを伝え、証証権現の本地は阿弥陀如来である、といっております。

本地というのは、地が一切万物の根本源となるにたとえて、一切諸仏諸神の根本となる御真体を『本地身』といっております。本地身とはだいたい密教で多くいう言葉ですが、浄土の三部経からすれば阿弥陀如来さまは、一切諸仏諸神の本地身であります。観経には、無量寿仏を見るものは十方無量の諸仏を見るのと説いておられますが、弥陀如来が諸仏の本地身（根本身）であるからこそ、そのように説かれているのであります。そしてまたそのことは、『一切諸仏諸神諸菩薩の王なり』というふうに表現してもよいのであって、ために観経には、阿弥陀如来さまのことを『諸仏如来』と呼

び、その浄土を『諸仏の家』と説いているのであります。

これは重大なことであって、お釈迦さまが一代の御説法の中で阿弥陀如来のことを一ばん多く説かれたのも、じつにこのためだったのであります。諸仏の王であるから一ばん多く説き、諸仏如来などと呼ばれたのであって、第二の釈尊とまでいわれた竜樹菩薩も、『阿弥陀等の諸仏』という表現を用いて、阿弥陀仏を諸仏の代表仏格（王）としているのであります【十住毘婆娑論】。小乗から大乘に移り、千部の論主とまでいわれた仏教の大方者天親菩薩も『世尊われ一心に尽十方無碍光如来（阿弥陀如来）に帰命したてまつり』【浄土論】といつて、最後には、諸仏の王たる如来に絶対帰依したのであります。

そしてお釈迦さまは、さらにこの裏付けを明しておられます。それは楞伽經というお経に『十方諸刹土の衆生菩薩中、所有法報仏化身及び変化はみな、無量寿極樂界中より出づ』と説いておられることであって、阿弥陀如来さまから、一切の諸仏・諸神・諸菩薩が生れる、というのであります。元祖上人も大原問答の中で、これを主張しておられます。小経の後半六方段で、六方の諸仏が阿弥陀如来のお徳を讃歎し、その救済の真実を証明し、最後に、お釈迦さまが阿弥陀仏の信仰を説かれたことを、諸仏がたいへん喜ばれた由を伝えてお

りますが、これはやはり、阿弥陀仏が諸仏の王であり、親であり、本地であることを表徴したものであります。

三部経の説時

三部経がいつ頃説かれたお経であるか、それを物語るのも、外では無い三部経の内容それ自体であります。

三部経はお釈迦さま晩年のお説法であって、法華経などよりも、後に説かれたお経であります。日蓮聖人はこれを誤って、三部経は法華経より前に説かれた方便経であるといい、創価学会などもそれを鵜呑みにしておりますが、このように経典を誤って解釈したのは、本当の御利益など出てくるわけがありません。

先づ三部経が、法華経などより後のお経である、というわけを述べますと、観経が一ばんの証拠になります。

観経は、王舎城の皇太子阿闍世が、悪友提婆達多にそそのかされて、早く王位につこうとして、父頻婆娑王と、母韋提希夫人とを牢獄に幽閉し、獄中でこれを嘆ぐ韋提希のために、お釈迦さまが、その苦悩から救われる方法を教説してくだされたのがこの経で、『淨除業障生諸仏前経』（業障を淨除して無上最善に至るの経）とも名づけられるのであります。

それでこの阿闍世王の史実を科学的に見ていくことが、観経の説時を決定するわけですが、諸種の資料から、学者の説となつていふところを見ますと、阿闍世は少年時にも提婆達多のおだてで父王を殺そうとし、驚いた王は大臣と計り、一時王位をあづけて、阿闍世を摂政の王としたのでありました【五分律】。この摂政時代に、お釈迦さまが靈鷲山で法華経を説かれましたので、阿闍世はその席につらなり、これを拝聴しました。それが法華経の聴聞衆中に『韋提希の子阿闍世王』として記されているのであります。（法華係の人は、「韋提希の子」というのは、このとき恐らく父王が故人となつていたためであろうから、法華は観経より後である、といつてますが、阿闍世は別名『阿闍世韋提希子』とも呼ばれたのであって、父王が死んだから、こう呼ばれたものではなく、法華係のこの説は誤りです）しかし法華経の説法が本格的に進められたとき、罪根深く、増上慢の人達は、中座退去したのであります。この人達は五千人ほどおりましたが、阿闍世もその中に混つて退去したのでした【法華経方便品】。それでこの時法華経を最後まで聞いていれば、立派な人間にたしかれたのですが、途中で退出したため、悪心は止まず、父王の命を断たぬ限りは、完全に王位を食ふことができなかつたと思ひ、ついに父王を獄に投じ、獄死させてしまふので

あります。この二度目の大逆事が、即ち觀經の説かれる動機になった事件で、その後阿闍世は発病して苦しみ、前非を悔

い、釈尊に救いを求め、大なる仏教信者となり、仏滅後二十四年頃まで生きたといわれます【望月博士・浄土教の研究】。

そして『涅槃經』に、父王を殺した阿闍世は、三カ月後に釈尊が入滅することを知って驚いたとあります。すると觀經は釈尊入滅の四カ月ばかり前に説かれたものであることがわかります（父王幽閉の二十一日後、母韋提希も投獄され、それから七日後に父王獄死、間もなく阿闍世は罪を恐れて発病、釈尊に救いを求め、このとき釈尊はあと三カ月で入滅すると仰せられた、というから觀經は仏入滅より四カ月ばかり前に説かれたわけである）。釈尊の御入滅は八十才の二月十五日ですから、觀經は七十九才の晩年に説かれたものであります。

これに順じて、大經の説時を見ますと、大經は法華と觀經の中間に説かれたことがわかります。元祖上人は寿前觀後といつて、内容からいって、寿經（大經）が觀經の前に説かれたものである、と教示しておられます。そしてこの大經が法華より後である、という証拠は釈尊出世の本懷（この世に outcomes になられた目的）を經中に説いておられるからであります。

釈尊出世の本懷

それは大經を説くとき、お釈迦さまは常に尊いお姿になられたので、弟子の阿難がそのわけを尋ねたところ、お釈迦さまは『如来無尽の大悲を以て三界を矜哀す。ゆえに世に出興して光く道教を闡き、群萌をすくわんと欲して、恵むに真実の利を以てす。無量億劫にも値いがたく見がたし。なおし靈瑞華のありて即ち出づるが如し』、自分はこれまで三界を救うため多くの教えを説いたが、最後にもっとも尊い教え、『真実の利』をこれから説こうと思う。それは靈瑞華（三千年に一度咲くという憂曇華）が出るように尊いものであり、そのために、姿がいつもと違うのです。と答えられたのであります。つまり出世の本懷を説き出されたのが大經であつて、この經には、お釈迦さま自づから仰せられておられるごとく、法華經などにも説かなかった『真実の利（念仏の道）』を説いているわけですから、法華經をも含む多くの觀經より、大經が後のお經であるわけです。

このことは別に、法華經を『難信難解』の經と仰せられたのに対し、大經を『難中の難……この難に過ぎたるはなし』、小經を『甚難』といつて、法華よりも意味の深い經である、と仰せられたことによつても知られ、また法華經寿量品では

七十二才 法華經を説き始む

七十三才

七十四才

七十五才

七十六才

七十七才

七十八才

七十九才

八十才

法華經を終り淨土の三部經を説く

『つねに自

らこの念を

作さく、何

を以てか衆

生をして無

上道に入

り、速に仏

身を成就す

ることを得

しめん』と

うしたら衆生が無上道に至ることができ得るであろうか、と常に考へてゐる」といふ言葉で結ばれてゐるのに対し、淨土三部經には、その方法がちゃんと明示されており、とくに大經には『この人は大利を得たりとす。則ちこれ無上の功德を具足す』とあつて、法華經では解決されなかつた点を、大經で解決されており、とにかく内容のすべてからいって、大經は法華經より後に説かれたものであることが、明瞭であり、最近は學者もこれに着眼してゐるようであります。

小經は先述の通り大・觀二經のあとに説かれたものであります。

したがつて図示するとこの通りで、七十九才の初期に法華

經を説き終り、のちは専ら、大經・觀經小經と淨土の三部經を説かれたのであつて、大經と同系本異經たる大宝積經に、念法を説かれた釈尊は『如来の作すべき所のものは皆すでに作せり』といつておられますが、文字通り、御一代最後の三部經の中で、念仏の大利無上功德・眞実の利、を説かれたお釈迦さまは、これで娑婆世界でのなすべきことがらを、全部終えられたのであります。

三部經こそ、一切經の結經であり、釈尊出世の本懷であつて、とくに法華經・壽量品でアウトラインだけを示された『久遠実成の仏』を、三部經では明瞭に『阿彌陀仏（無量壽仏）』と仏格化されたのであつて、この点、法華を信仰する人は、最後に『南無阿彌陀仏』の称名念仏までこなければ、眞の法華の行者とはならないのであつて、眞の御利益も頂けないのであります。

創価学会がたいへん大切にしている中国の天台大師は、亡くなるとき、周囲の人に法華經と無量壽經を唱誦させたのですが、これは法華經は諸經中の王であり、その王經の、さらに結經・奥經となるものが大經であるから、それでこの二經を読ませたのであつて、即ち淨土經こそ、一切經中の王の王、結の結、奥の奥、という価値高い經であり、この尊さによります勇猛の信心をいただくのであります。

御法語をいただく

夫れ現生すら猶もて疎からず、同名号を唱へ、同一光明の中にありて、同聖衆の護念を蒙る。同法尤も親し。愚に疎しと思しめすべからず。南無阿弥陀仏と唱給へば、住所は隔といへども、源空に親しとす。源空も南無阿弥陀仏と唱へたてまつるが故なり。念仏をこととせざる人は肩を並べ、膝を与といへども、源空に疎かるべし。三業皆異なるが故なり。(十六門記)

建永二年二月、上人御齡七十五のとき、遠流の宣命が下りました。上人はこれをかえて「源空が遠流を蒙ること、辺土の化縁すでに熱せり。誠によろこぶ所なり」と申され、少しも恨むが如き様子がありませんでした。しかし道俗といわず貴賤といわず皆歎き悲しみ、特に厚く帰依していた藤原兼実公は上人を一夜おまねきし、法性寺に御逗留願うことにしました。その時、兼実公に示されたお詞が「会者定離は常のならひ、今はじめたるにあらず。何ぞ深歎んや」というのであります。そして最後にこういわれました。

「今ここで分れることは、春の夢の短かさに似て、ほんの暫の悲しみに過ぎない。浄土において再びお逢いすることは甚だ近いと思つてゐる。もし一步先きに浄土に往くことになれば、有縁の人々を浄土に導くようにしよう。これ即ち極楽に生れる楽しみのうちの一つである。」

しかし極楽に往かずとも、現世のこのままであつても決して疎遠になることはない。お念仏を唱える人があれば、それは即ち同じ光明の中に日日を暮しているわけであるし、また同じく多くの仏さまにまもられた生活を送っているのである。同じ信仰に生きている者同士は、かりにも疎遠等と思つてはいけない。あなたが南無阿弥陀仏と唱えるなら、私も亦南無阿弥陀仏と唱えているのであるから、遠流のために住む所こそ遠く離れたにしても、私と最も親しい人となる道理である。もしお念仏を唱えない人があるなら、共に肩を並べ、膝つき合せていたとしても、私にとっては疎遠な人というべきである。何故ならお念仏を唱えぬ人と私とは、信仰はもちろんのこと、すべてが異なる人なのである。

それでも兼実公は悲哀の心去りやらず、遂に一言もいい得ませんでした。その翌三月十六日に上人は法性寺を発ち、配所に向われしました。十六門記にはこの時のことを「帝都は闇に燈を失しがごとく。辺土は盲の明を得るに似たり。洛陽は悲を含、田舎は喜を懷。悲ても念仏を唱。喜ても名号を称す。悲喜俱に善を勸。大権の化益誠に巧なり」とあります。

兼実公は上人こそ生仏であると固く信じ、専修念仏にはげんでいただけに、離別の悲しみはげしく、上人も亦兼実公に最後の教えをされたわけです。この御詞の最後に、お念仏を唱えない人は、「三業皆異なる」者であるとするのは実に痛烈であります。三業とは身口意の三業で、われわれの考えることの総てのことを意味します。従つて三業皆異なるとは、人間として全く異なる人、本質的に疎遠な人ということです。それとは逆にお念仏を専一に唱える人は、どこにどうして暮しているように、同じ光明の中に生きているという親密さを持つ人であると申されたわけです。

(村瀬秀雄)

日本一の生産・設備

梵鐘 (45cm～85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm～51cm)

音響理學博士青木一郎先生

梵鐘界の權威 日展 藝院賞受賞 参事 香取正彦先生



鋳物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 040 8847番 本社工場 高岡市横田

◇日日の修養と無言の布教◇

修養ひめくり

価 格 100 円 送料実費

（10部以上割引あり）

美麗2色刷 32枚綴 上質紙使用

法要その他の記念品に最適（箱入・寺名等刷込の相談に応じます）

申込先 東京都千代田区飯田町1の21

法然上人鑽仰会

振替東京 82187 電話(332) 5944

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

（送料 六円）

会費一カ年 金六〇〇円

（送料 不要）

浄土 六月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便認可

昭和三十三年五月廿五日 印刷

昭和三十三年六月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田町一ノ二二

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京三三二局五九四番

振替東京八二一七番